

福岡・大牟田の空襲を生き延びた

永田靖恵さん(89)

「空赤く燃えひろがれど、壕(ごう)の中、奇れる亡骸(なきがら)を見きわめ難し」。アキラギ派の歌人、山本和夫が妻子の死を悲しんで直後に詠んだ碑が建つ福岡県大牟田市。航空機燃料(人造石油)を製造する化学工場があり、戦争末期、終戦一週間前の8月8日までの5回空襲を受けた街で、「戦争する国」ノ一の声が高まっています。

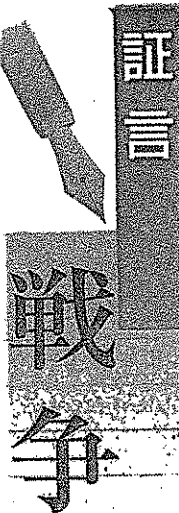


永田靖恵さん

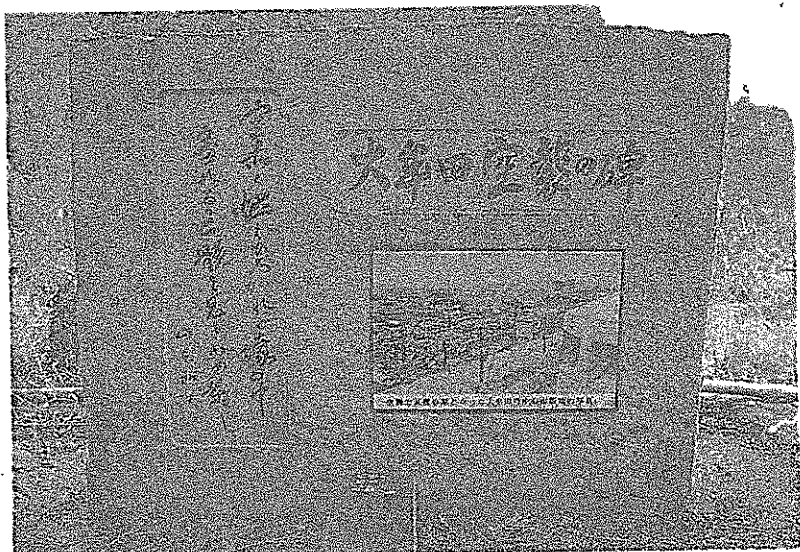
永田靖恵さん(89)は1945年、市内のデパートに勤務していました。商品が減り、売り場は1階だけに。年配者以外の男性職員は戦地に赴き、靖恵さんら女性は警報が鳴ると、夜中でも店に駆けつけました。

前年11月に続く空襲は6月18日。店にいて緊張している、正面玄関のガラスを突き破り焼夷(しょういう)弾が飛び込み、商品が燃えあがりました。

「店内に備え付けた防火



子を殺されてたまるか



普光寺公園にある大牟田空襲の碑＝福岡県大牟田市

用水からバケツリレーで消火しました。周りの商店は炎に包まれ、熱風と煙がドットと入ってきました」

数日後、焼けなかった家も強制疎開を命じられ、行き場のない人たちは裏山の防空壕暮らしを始めます。7月27日、三たびB29爆撃機124機が襲います。爆弾は10万人余の市民に2発ずつ投下された勘定の約

875トに及びました。焼け野原の街。マンホールに逃げ込んだ靖恵さん。火に追われた人たちが次々入ってきたため、水をかぶって再び火の中を走り、深さ30センチの川に身を横たえて助かります。

今年4月のいっせい地方選。「最後の選挙になるかもしれない」と永田さん。戦時中、出征する兵士に贈った「千人針」ならぬ1000人対話に挑戦します。

日本の戦争指導部は「本土決戦」「一億玉碎」を叫び続け、米軍は容赦なく民間人をも狙い撃ちにし、8月7日には、B24爆撃機とP47戦闘機が昼間飛来し、すさまじい破壊力を持つ1000ポンド爆弾を工場群に投下し、街中が大穴だらけになりました。靖恵さんは米戦闘機の機銃掃射を受け、壕に飛び込みますが、逃げ遅れた壕の住人の5歳と3歳の子どもが銃撃され、手をつないだまま亡くなりました。

1000人対話

「1000人を超える人と対話して、いっぱい共感してもらい、元気ができました。来年の参院選も頑張れるみたい」と笑います。

8月29日には、「九条の会・おおむた」が呼びかけた市民集会で雨のなか、自身の戦争体験を話しました。(名越正治)